



## 吉野川第一期改修百周年に向けて⑬

### 吉野川の中洲を歩く―石井町藍畑地区の歴史探訪―

石井町文化財保護審議会委員 立石 恵嗣



#### 1. はじめに

日本屈指の大河吉野川は「母なる暴れ川」とも呼ばれます。流域の人びとは古来より洪水や氾濫という暴虐に耐え、大河のもたらす肥沃な堆積土を恵みとして、豊かな日本一の藍作地帯に育て上げました。今回は吉野川中流域の代表的な中洲（川中島）である石井町の藍畑地区を歴史探訪して、流域の人びとの営みを探検してみたいと思います。

#### 2. 吉野川流域絵図の発見

十年以上も前のことでした。石井町教育委員会の職員が、役場の倉庫の片隅で見つけたといって置かれた古文書を見せてくれました。広げると縦横とも2.5m以上もある和紙の彩色絵図でした（図1）。



図1. 絵図写真全図「名西郡高畠村癒上り絵図」（石井町蔵・徳島県立文書館所保管）  
筆者加筆

絵図には「寛保2年」（1742）との年号記載があり、北側には「吉野川」、南側には「枝川筋」（現・神宮入江川）が描かれ、枝川は東端から北流しており、両川に挟まれた土地には、耕地が短冊形に多数と彩色されて描かれていました。小さな張り紙も無数にあります。現存する「松熊大明神」（松熊神社）や「龍王」の地名などから現在の石井町藍畑地区の高畠と中須が描かれた絵図のようです。確認のためこの地域のシンボル「第十堰」をさがしてみましたが見つかりません。それもそのはずで、作成年として記されている「寛保2年」（1742）は「第十堰」が築造されたとされる宝暦2年（1752）より十年程前です。第十堰が築造される前の絵図のようです。

何のために作成された絵図だろうか？ 歴史地理学がご専門の徳島地理学会の羽山 久男先生に連絡して調査を依頼しました。駆けつけてくださった先生は、会議室の床一杯に広げた絵図のデータを見て、「貴重な物です」とおっしゃり、後日調査成果をご教示いただきました。

### 3. 「名西郡高畠村癒上り絵図」を読む

#### 1) 読み取れる内容

- ①手書き・彩色の見取り図、大きさ281×251cm。縮尺は約600分の1程度。
- ②作成年 寛保2年（1742）。作成者は安部伊右衛門（検見役人）ほか5名の藩の役人たち。
- ③絵図中には龍王・野神・松熊大明神などが描かれ、中須地区中心部の吉野川と枝川沿いの耕地が描かれている。
- ④一部の藪以外はすべて畠地。筆数は296筆で、内47筆は「生地」（原野）。
- ⑤耕地には御蔵（藩直轄地）169筆と、給地（知行地）の区分があり、多くは藩の直轄地で、蜂須賀一学87筆ほか6人の給地である。
- ⑥意味不明だが、多数の付箋（青・赤・茶・白色）の色分けがある。

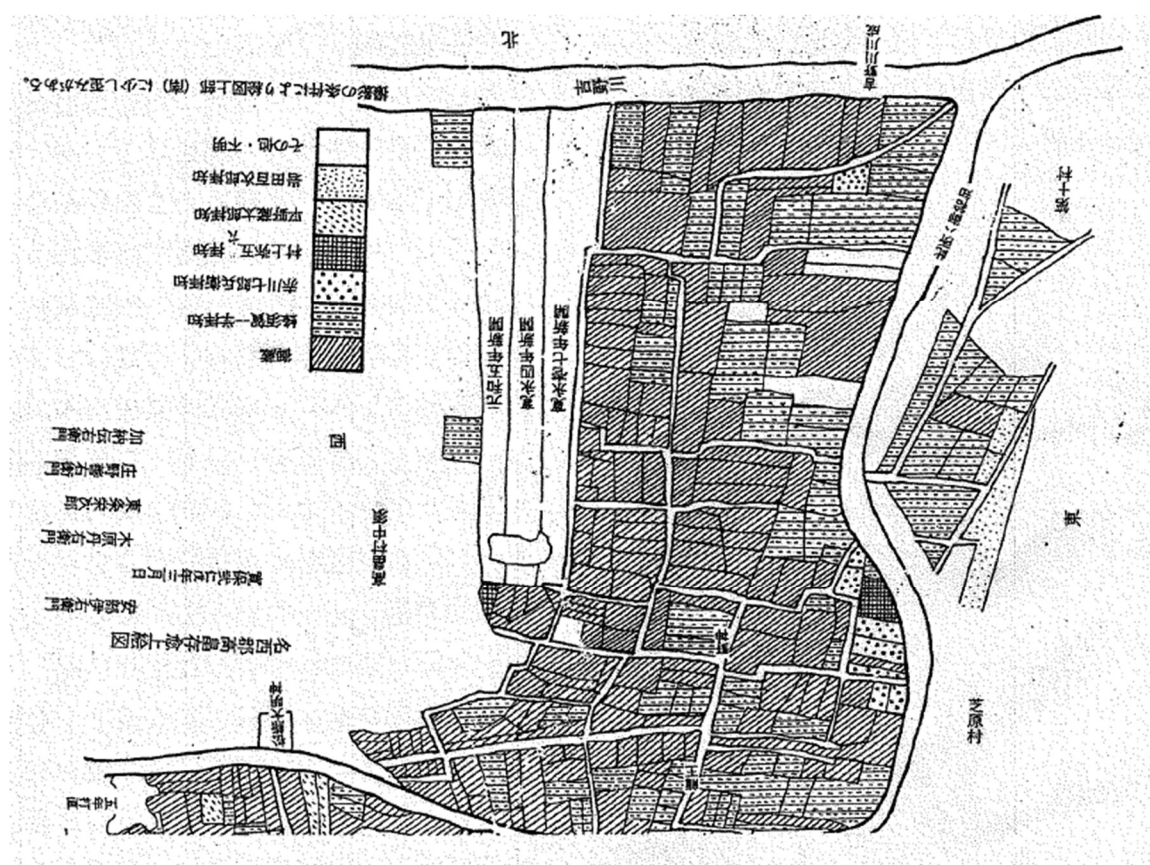


図2. 「名西郡高畠村癒上がり図」分析図（部分）羽山 久男 氏 作成資料 2013

## 2) わかること

本絵図は「癒上（いえあがり）絵図」と思われる。藩政時代に河川の氾濫・出水等により沿岸の田畑が「川成（かわなり）」や「砂入（すないり）」などと呼ばれる荒廃地になった際、復興作業により年貢が徴収できるようになるまでの間、救済措置として村役人等などが耕作地の状況を詳細に調査して「検見（けみ）奉行」に差出した際に作成された絵図と考えられる。

つまり吉野川などの河川の流域において、洪水・氾濫などにより「川成地」（荒廃地）となった耕作地は復旧するまで年貢が免除されたが、洪水から数年経過して復興し、年貢も取れるようになると、あらためて調査し徴税に備えて作成されたのである。

あらためて見てみると、一筆ごとに所在地・地目・面積・名負人（検地帳記載）・当作者（耕作農民）・御蔵・給地・給人などが記載されており、込み入った詳細な絵図の内容から江戸時代の年貢収奪の複雑さに驚かされます。当時の吉野川流域の景観や村落・社会構造を知るための貴重な絵図史料であることがわかりました。

## 4. 石井町藍畑地区の歴史的地理的特徴

実はこの藍畑地域は吉野川下流域においても複雑な地理的特徴を持つ地帯です。吉野川は四国山地と讃岐山脈に挟まれて上流から縄をなうように、また網の目のように川筋を形成しながら紀伊水道に流れ込んで行きますが、藍畑地区の東端第十付近で東流してきた吉野川が大きく北流する地点なのです。

現在の吉野川本流は「別宮川」と呼ばれた流路なのですが、藩政時代、吉野川の本流は第十堰地点から板野方面に向かい鳴門の撫養に注ぐ流路（現・旧吉野川）でした。藩政後期の開削や浚渫により本流の水量が激減し、板野郡など下流地帯に塩害が生じたため別宮川に越流堤<sup>えつりゅうてい</sup>を設置して、本流への増水を図るため築造されたのが「第十堰」でした。

天保11年1840に描かれた【吉野川絵図】（徳島県立図書館蔵）（図3）には、下流は第十堰から上流岩津までの吉野川の流路が縄をなうように描かれています。川筋に挟まれた舞中島、善入寺島、知恵島などの大きな川中島をはじめとした大小の中洲も数多く描かれています。藍畑地区も、吉野川流域に形成された川中島のひとつであり、北には吉野川の本流、南には支流である神宮川に挟まれて「自然堤防」に囲まれうす高く盛り上がった文字どおり「中洲（中須）」でした。加えて東流する本流が直角的に北に向かうことで、この地点は氾濫洪水の常襲地帯となりました。

（この地点で吉野川が北流するのには山間部から流れ出る園瀬川の直撃が地理的に大きな影響があったと考えられます。）



図3. 吉野川絵図（天保11年）筆者加筆  
（出典：森文庫資料（徳島県立図書館蔵）より）

頻発する洪水対策のため藍畑地区（旧東・西覚円村、高畠村、第十村）一帯には様々な治水構造物が施されました。「むらむらぬまかわせきとめのす村々沼川堰留之図」（図4）には、さかさせき逆関・みすはね越流堤・水刳・新川の堀貫など洪水や氾濫と粘り強く闘い続けた流域の住民による創意工夫の数々が見られ、その粘り強い執念に圧倒されます。

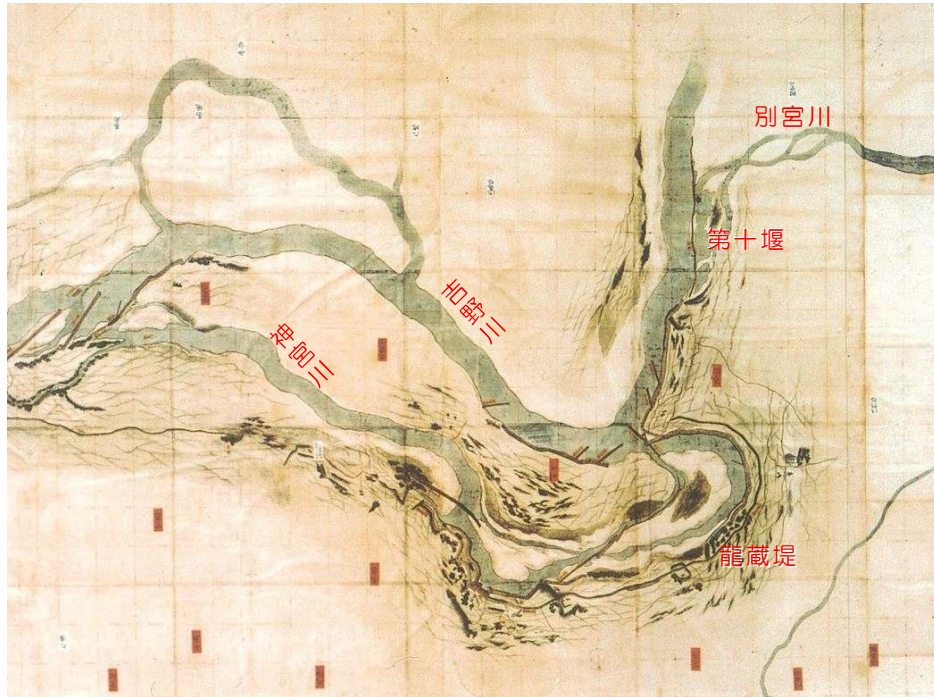


図4. 村々沼川堰留之図（部分）（年代不詳）筆者加筆  
（出典：大学共同利用機関法人 人間文化研究機構 国文学研究資料館「蜂須賀家文書」）

現在は明治期から大正期にかけて実施された第一期吉野川改修工事により、藍畑地区の北側には連続堤防が建設されると同時に、支流であった神宮川は本流との分岐点の上流部が埋め立てられ、再び合流する下流部では「入り江川」状態（現・神宮入江川）となっているので景観はすっかり変わっています。（図5）

また吉野川中下流域においてもこの周辺に関係する絵図や古文書、治水関係遺跡が最も数多く残っているのは治水に苦闘したことを物語っています。



図5. 現在の藍畑（高畠・中須）地区周辺の航空写真（令和3年1月撮影）  
※図中のエリア線は目安であり、実際の境界とは異なる場合があります。

## 5. 絵画に描かれた日本一の藍作地帯の原風景

しかし一方で、母なる吉野川はこの中洲に肥沃な土壌の堆積をもたらしました。砂質で水はけの良い土壌は畑作物には最上の収穫を保障したのです。流域の先人たちは洪水氾濫の暴虐を逆手に取り、藍作にとって絶好の土壌は、藩内においても最高の葉藍収穫高をもたらしました。流域の氾濫原には高く築かれた藍師・藍商の城構えといわれる豪壮な邸宅と白壁の寝床をもつ藍屋敷が点在していったのです。

次に、江戸時代後期藍作地帯を象徴する藍畑を描いた絵画があるので紹介しましょう。（図6.藍田灌水之図）

画面には、遠くには阿讃の山並み、中央には吉野川に浮かぶ帆掛け船が描かれています。手前には藍に水をやるために畑に掘られた井戸から組立式の「鏡立（かがみだて）」と呼ばれる釣瓶で男たちが交代で灌水作業をしています。中央のあぜ道には馬を引く農夫。右奥には白壁の寝床と藍屋敷が見えます。生長した藍葉は刈り取られて藍屋敷に運ばれ「藍切り」（刻み）から乾燥、「藍こなし」まで真夏の炎天下で行われる作業が続きます。藍作は水やりに限らず厳しい重労働です。連続堤防は当然ありません。江戸時代の藍作地帯の原風景とも言えるのどかな風景です。

作者の大原吞舟（1792～1857）は、阿波の出身といわれる江戸時代後期の京都の絵師で、天保14年（1842）名西郡東覚円村の藍商大磯次郎兵衛の求めで描いたものです。絵の上部には興源寺の住職玉潤による画讃があり、そこには大磯家の先祖が藍業をはじめ繁栄にいたるまでの経緯や戒めが記されています。

江戸時代、この地域を象徴する産業はいうまでもなく藍作でした。母なる暴れ川の恵みである肥沃な土壌と水を生かし流域の先人たちは日本一の藍作地帯に育て上げました。この絵は藍づくりの営みがこの地にしっかりと根着き、着実に隆盛していったことを物語り、当時の姿を余すところなく伝えています。母なる暴れ川「吉野川」がつくり出した舞台の上で演じられた先人の営み、洪水や氾濫と闘いながら営まれた先人の生活の生々しい記録を見ることができます。



図6. 藍田灌水之図（吉野中学校蔵・徳島県立文書館保管）

## 6. おわりに一土地に刻まれた営みの歴史を探訪一

本稿で紹介した藍畑地区を歩くと、足の裏に土地の高低やうねりをダイレクトに感じることができます。特に中須地区の場合、現在では連続堤防の建設により北部の吉野川本流は直接見ることはできませんが、集落から北部の吉野川側は急激に落ち込み、川まで坂道となっているところなど、連続堤防が建設されるまでの流域の景観を体感することができます。同じように南部の神宮川は、現在は埋め立てられコンクリートの三面張りの川となっていますが、かつての流路の中心部まで向かう坂道を実感する事ができます。

歩くことによって、母なる暴れ川吉野川が形成した地形とその上に築きあげた日本一の藍作地帯に先人の粘り強くたくましい営みに思いを馳せることができます。自然と人為の綾なす営みを味わうことができる歴史探訪をお勧めいたします。

### 【藍畑歴史散歩のポイント】

- |                |             |
|----------------|-------------|
| 1 第十堰          | 6 新宮堤       |
| 2 水除争記念碑（皇大神宮） | 7 新居嘉藤次墓地   |
| 3 松熊神社         | 8 神宮川埋立記念碑  |
| 4 藍屋敷（田中家）     | 9 印石（産神社）   |
| 5 藍屋敷（武知家）     | 10 志摩利右衛門墓地 |



図 7. 藍畑地区周辺地図  
(出典：地理院地図〔GIS MAP〕に筆者加筆)